

序

これは、ボードレールの詩および詩人としての彼の営為を、〈存在〉という観点から読もうとする試論である。

もとより〈存在〉という言葉は、ある意味では、誰にとってもあまりに自明なものでありながら、しかしそれを定義したり、解説したりすることなど到底できそうではない。存在に対する暗黙の了解の上に立たずには、定義そのものすらが可能ではないからである。このようなアポリアに根ざした〈存在〉という言葉にまつわる曖昧さは、この試論の全体にわたって見出されるだろう。ここでは、この曖昧さを説明することは、ほとんど試みられない。

実際、ハイデガーによってかくも精緻に定義された存在と存在者、あるいは存在的と存在論的といった述語的区別は、ここではまったく問題にされてはいない。それというのも、直接的に存在の

意味を問うことが問題ではなく、むしろなによりもまず一人の詩人の作品のなかに、その詩人固有の仕方であ問われている存在の意味の問いを見出すこと。そして、その問いを身をもって生きたその詩人の生の輪郭をデッサンすること、それが問題だからである。イマーヂュを通して、あるいは言葉そのものを通して、現代の詩は常にその最先端、その最深部においては存在に向かって問いを発し、存在を見詰めようとし、存在を生き、そして無言の裡にも「存在の冒険」を企て続けていたように思われる。そして、ボードレールの作品こそは、そうした冒険の紛れもない嚆矢であり、またもつとも熾烈な存在が展開された場のひとつであるだろう。われわれは、この〈存在〉という次元において、すなわち「意識」や「心理」よりはもう少し深い次元において、ボードレールの詩をわれわれの方に向かって読んでみたいと思う。そして、それはおそらく詩の中で言われていることだけではなく、詩そのものを成り立たしめている見えない原理、見えない力について探求することになるだろう。ひとつひとつの詩が生み出されてくる知的冒険のいわば存在論的な構造と、その構造の変容を通して、詩人の生の全体的な在り様を剔抉すること。そしてそこに現代文化の根源的な諸問題を重ね合わせること。それがわれわれの読みの方向である。

とすれば、ここではボードレールとともに、われわれ自身もまた同じ存在の問いのなかに身を置き、同じ冒険に身を委ねなければならぬであろう。それこそが、詩人とわれわれとの唯一の正当な結びつきにほかならないのである。